

古代の遺構と遺物

- 古墳時代 -

古墳時代の遺構検出面は、中世面下層の黒褐色土層(古代の遺構面・包含層など)を除去した標高6.9m前後の青灰色粘質土層の上面である。遺構面全体は、ほぼ水平な拡がりをみせるが、調査区東側の自然河川(吉野川)に近づくにつれ、緩やかな傾斜で下降する。遺構検出面上層の黒褐色土層は厚さ0.3m程度であり、詳細に観察すると3層に分けることができる。その土層中には古代(おもに奈良時代)の遺物が包含されており、土層断面にて観察される遺構の状況などから、実際の生活面は黒褐色土層中に分層される最下層と考えられる。しかし、遺構面として平面的な把握・検出が困難であり、時間的な制約のために、明瞭な青灰色粘質土層の上面を一括して古代(古墳時代・奈良時代)遺構検出面として対応せざるを得なかった。なお、各遺構の時期については、遺物や、遺構の方向性などから判断した。

1. 遺 構

古墳時代の遺構は、溝7条と井戸1基である。そのうち遺物を伴う遺構は、溝状遺構4-850・10-5046、井戸10-5055である。また、溝状遺構9-252・10-5061～5064は、出土遺物はないが、それぞれの方向性が古墳時代の遺構の方向性と合うことから、同時代の遺構であることが推察されるため、ここで一緒に報告する。以下、遺構ごとに記述していく。

溝 状 遺 構

遺構4-850(図190～192) 調査区のほぼ中央に位置し、南北方向にのびる。規模は、検出長約19m・幅0.54m～0.73m、検出面からの深さ0.21mを測る。断面形は緩やかなU字状を呈する。多量の遺物が確認されたが、それらは特に溝の中央より南側に集中しており、いずれも底面から0.15m前後浮いた状態で検出された。土器は、大半が破片となり、薄い層を成すように密集して展開していた。ある程度の部位がまとまり、そのまま潰れたかのような破片も一部に認められるが、完形近くまで復元される個体は非常に少ない。また、大型の鉢(図200-39)や甕(図198-22・23)、器台(図199-36)など、比較的広い範囲に散らばる状況で検出されたものもある。このような状況から、これらの土器は既に破損したもの・破片となったものがまとめて廃棄されたものであると考えられる。石器は、土器片と接するような状態で出土しており、土器とともに廃棄されたものと見られる。あるいは、土器の廃棄の際に破砕行為を伴うものであったとすると、これらの石器は破砕行為に使用したものであることが想像される。

遺構10-5046(図192) 調査区中央よりやや西側に位置し、東西方向にのびる。規模は、検出長約23m・幅0.34m～0.96m、検出面からの深さ約0.2mを測る。断面形は緩やかなU字状を呈する。この溝は東側で溝4-850と交わるが、攪乱の影響により先後関係は確認できない。遺物は、埋土中から若干量の土師器片を検出したのみである。

遺構9-252(図193) 調査区の西側に位置し、ほぼ東西方向にのびる。規模は検出長8.5m前後・幅0.3～0.66mを測る。検出面からの深さは0.38mを測るが、溝底は西から東にかけて僅かに深くなる。

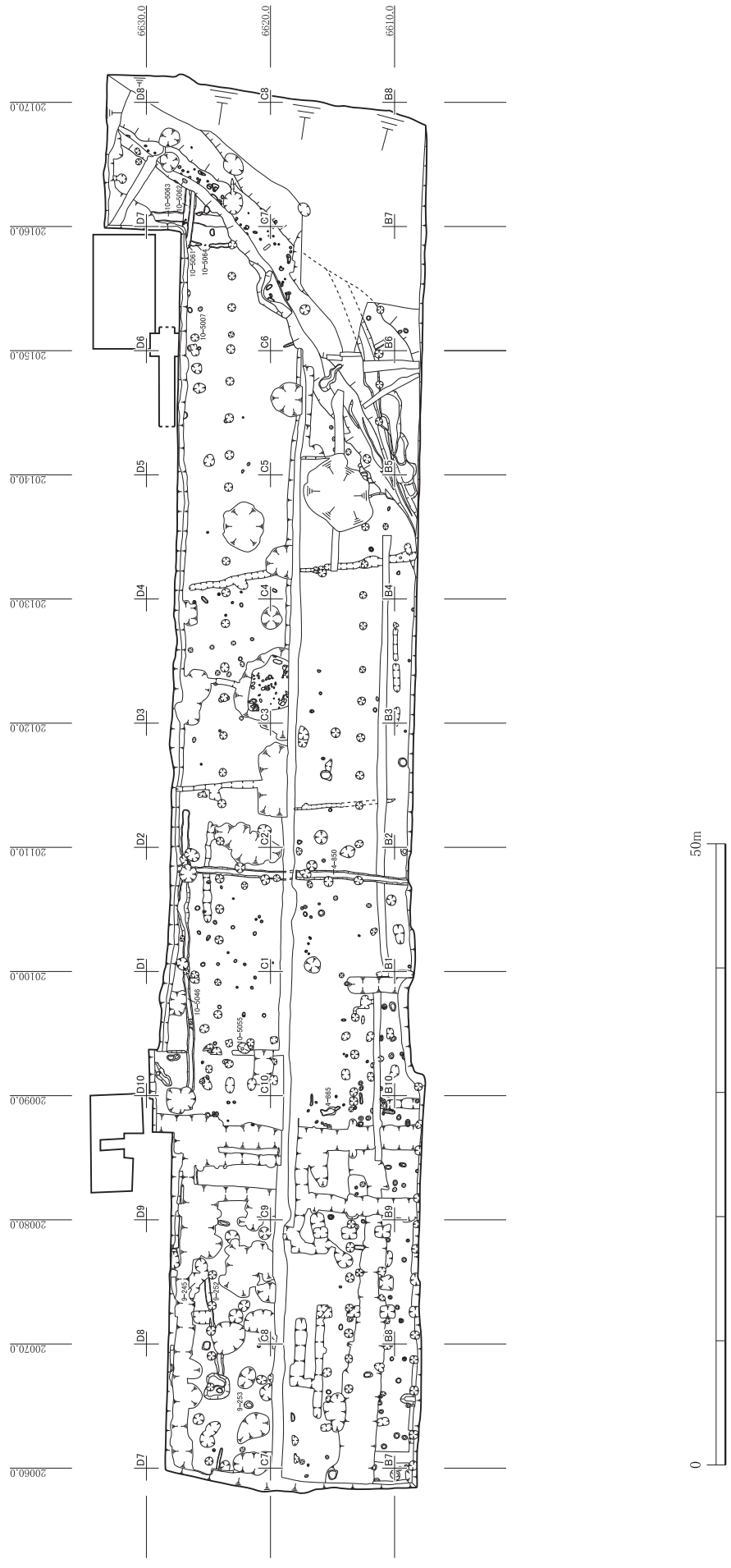


図189 古墳時代の遺構 (S=1/500)

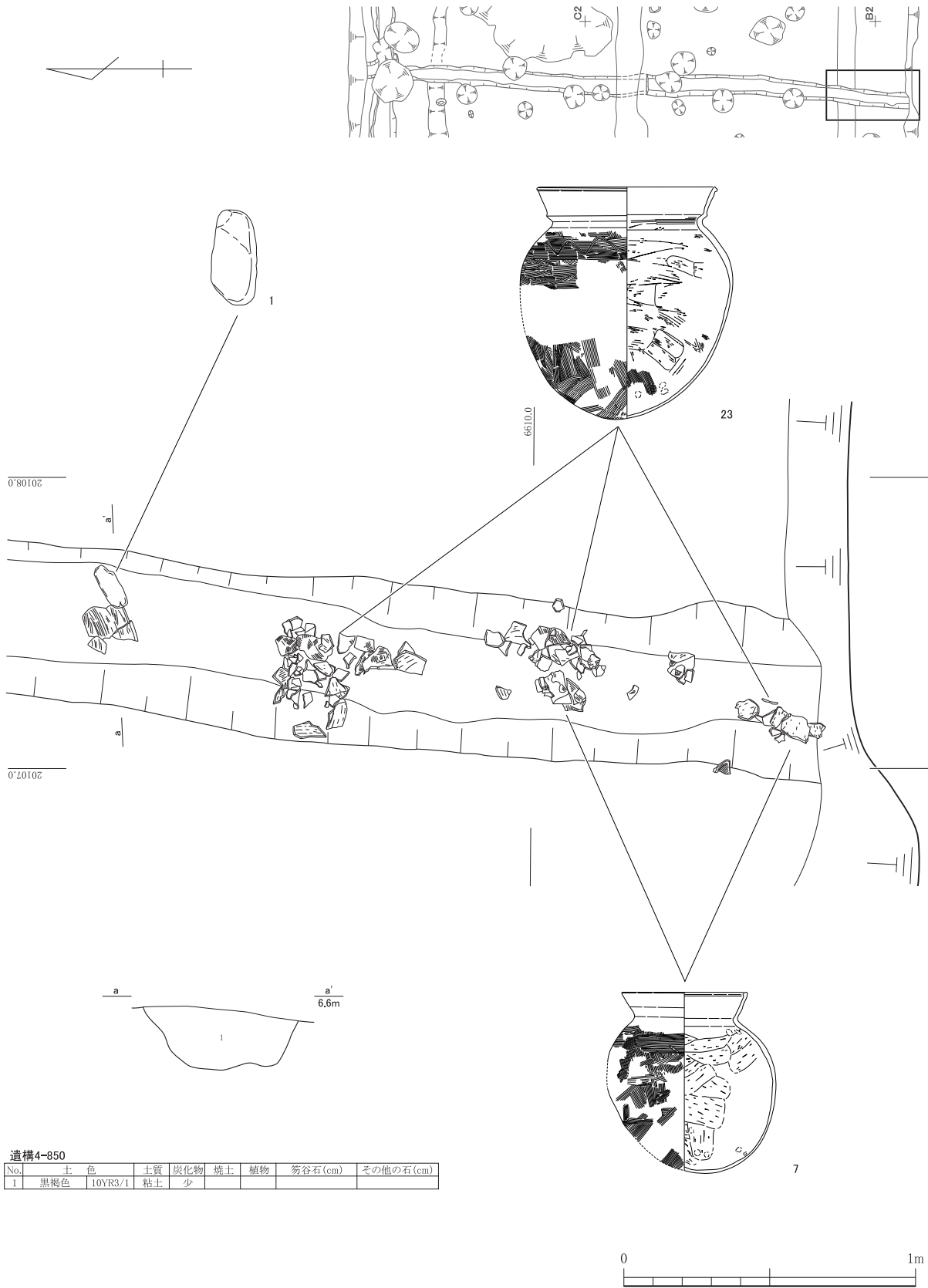


図190 溝① (S=1/20)

断面形はやや歪な逆台形状を呈する。なお、この溝は位置関係や底面などのレベル高から、溝 10-5046 から連続する一つの溝である可能性がある。

遺構 10-5061 (図 194) 調査区東側に位置し、ほぼ東西方向にのびる。規模は検出長 4.7m・幅 0.39～0.52mを測る。検出面からの深さは 0.14～0.25mを測り、溝底は西から東にかけて僅かに深くなる。断面形はやや歪な逆台形状を呈する。

遺構 10-5062 (図 194) 調査区東側に位置し、溝 10-5061 と重複しながら同じ方向にのびる。重複関係から溝 10-5061 に先行するものと見られる。規模は、検出長約 4 m・幅 0.45m以上、検出面からの深さ約 0.1mを測る。

遺構 10-5063 (図 194) 調査区東側に位置し、溝 10-5061・5062 と直角に交差する。重複関係から遺構 10-5061・5062 に先行するものと見られる。規模は、検出長 6.3m・幅 0.68m～0.95m、検出面からの深さ約 0.1mを測る。

遺構 10-5064 (図 194) 調査区東側に位置する。溝 10-5063 の約 1.5m西側に平行してのびる。中央部で一部途切れており、幅約 0.60mの部分が土橋状に掘り残される。重複関係から遺構 10-5061・5062 に先行するものと見られる。規模は、土橋部分を含めた検出長 3.2m・幅 0.27～0.4m、検出面からの深さ約 0.07mを測る。断面形は緩やかなU字状を呈する。

井戸

遺構 10-5055(図 195) 調査区中央よりやや西側、溝 10-5046 より南側に位置する素掘りの井戸である。検出面での規模は長径 1.05m・短径 0.75mで、検出面からの深さは約 1.37mを測る。平面形は不整楕円形を呈する。断面形は上半部については逆八の字形を呈すが、上面から約 0.8mの箇所で傾斜がやや急角度に変換し、それより下半は垂直に近い壁面となる。井戸埋土の断面観察によると、炭化物や焼土、土器片を含む上層(1～13層)と、含有物のない下層(14～19層)とに分けられる。土器片は、標高 6.4m付近を境として分布が上下に分かれ、下部の土器片の分布域に焼土を多く含む土が堆積する(図 195)。なお、上下に分布の分かれる土器片に接合関係が認められることから、この分布の差は時期差を表すものではないようである。含有物のない下層の堆積は、周囲の崩落などによる自然堆積と見られるが、上層については人為的な埋め立てが為されたことが考えられる。上層の堆積状況から、自然堆積の直上に土器片の一部を廃棄した後、一度焼土などを多量に含む土で埋め込み、その後に残りの破片を廃棄した状況が窺える。土器については、完形に復元できるものはないこと、各個体の破片出土地点にまとまりがないことなどから、別の場所で壊れた土器を廃棄したことが考えられる。そして、廃棄の際に火を伴う行為が実施された可能性、手順を踏むかのような丁寧な埋め立ての状況などから、井戸清祓に関わる行為の痕跡である可能性が考えられる。

以上の遺構の配置や、包含層中の遺物の分布状況、周辺での過去の調査の成果などから、古墳時代の遺跡の主体は本調査地より西側に位置することが推測される。また、包含層からの出土遺物がすべて A～C 1区から西側に展開していることから、その部分に延びる溝 4-850 は、何らかの区画としての性格を持つことが考えられる。

(立壁)

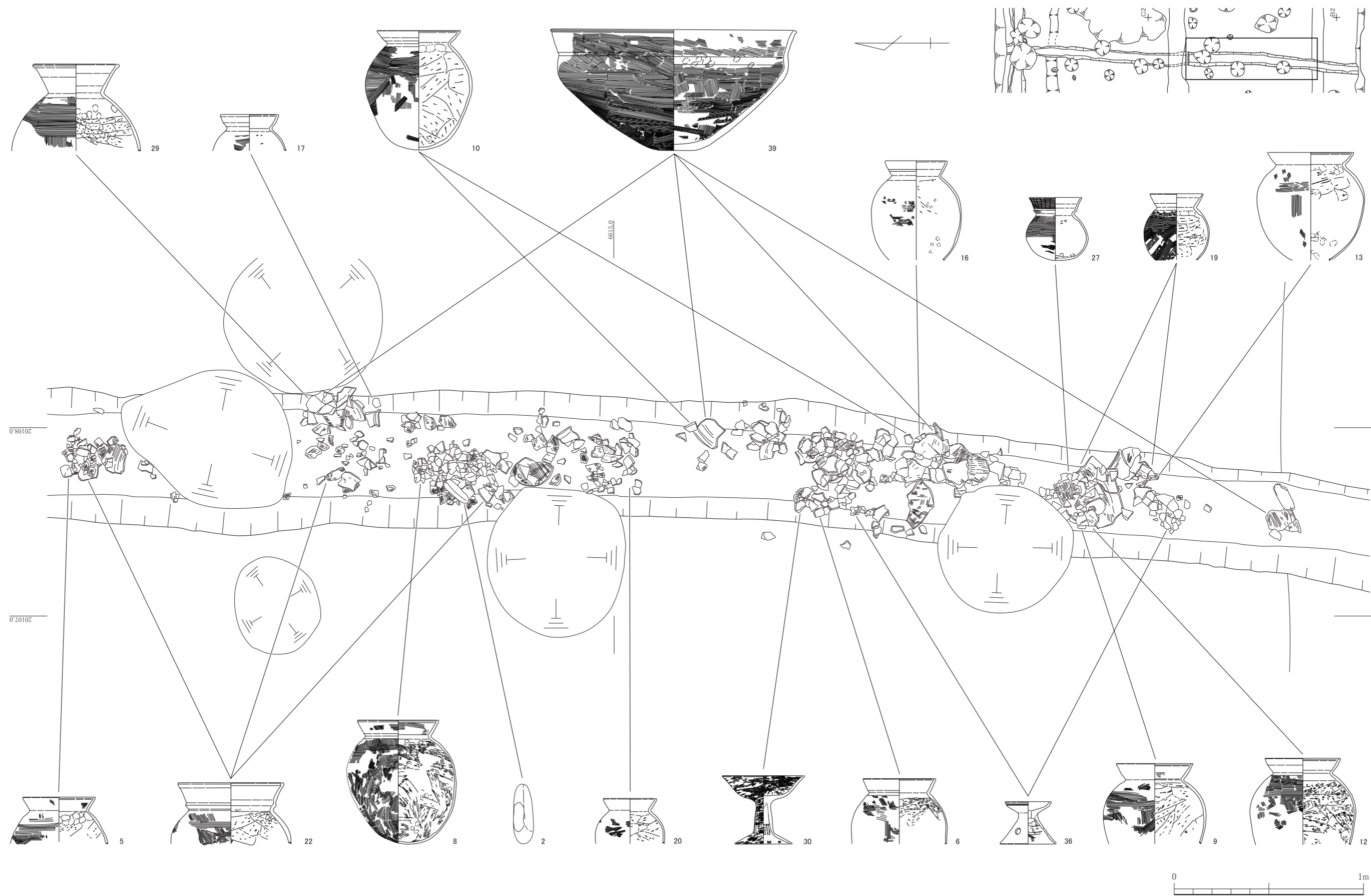
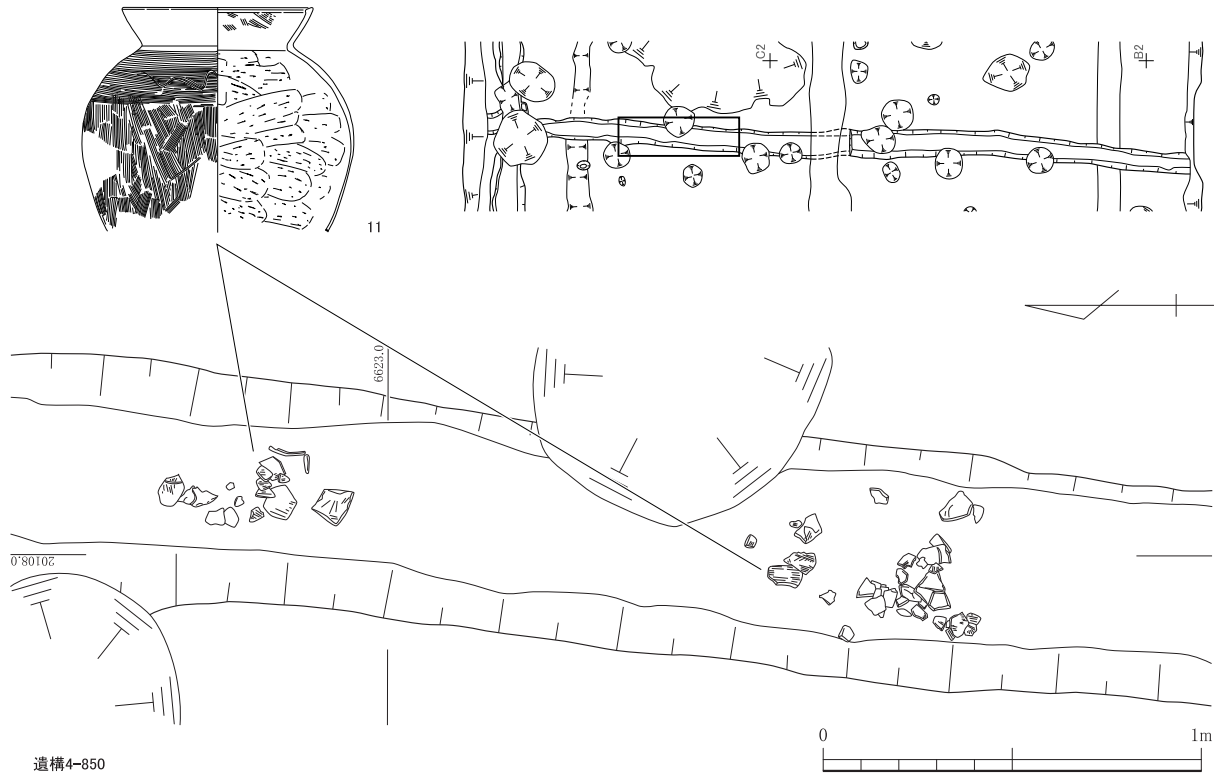
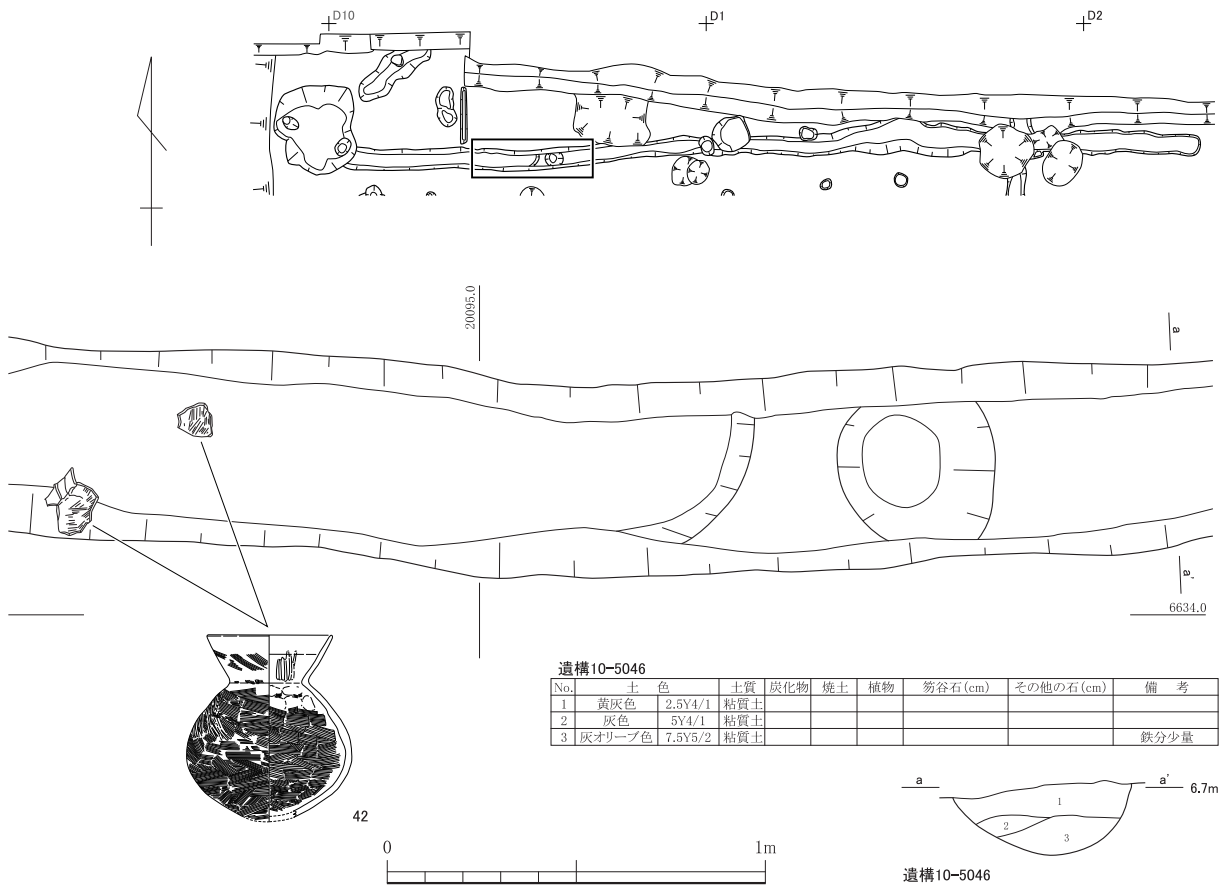


图191 沟② (S=1/20)



遺構4-850

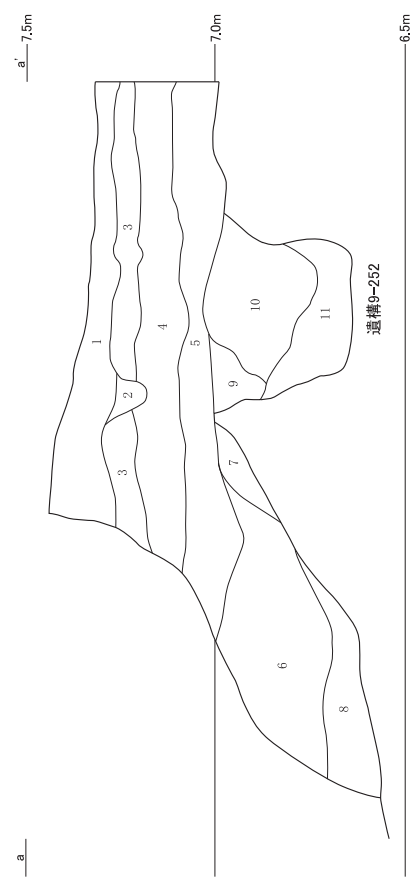
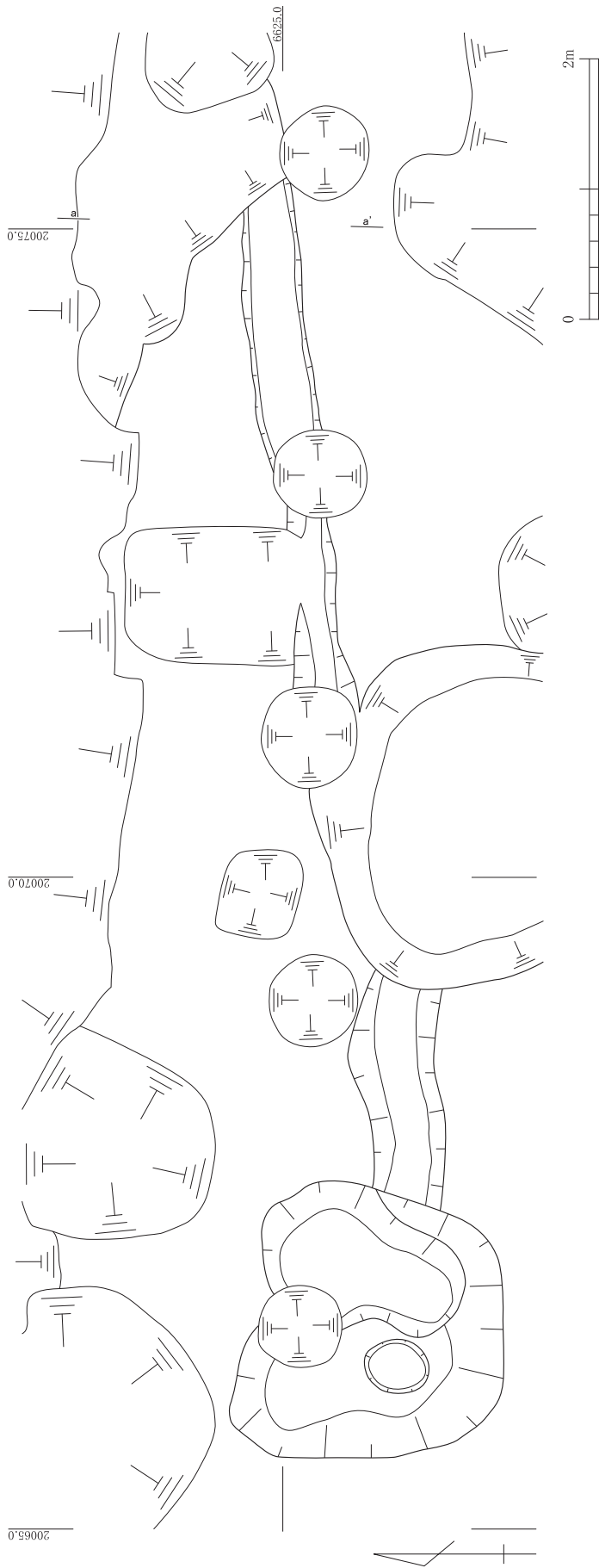


遺構10-5046

No.	土色	土質	炭化物	焼土	植物	笏谷石 (cm)	その他の石 (cm)	備考
1	黄灰色	2.5Y4/1	粘質土					
2	灰色	5Y4/1	粘質土					
3	灰オリーブ色	7.5Y5/2	粘質土					鉄分少量

遺構10-5046

図192 溝③ (S=1/20)

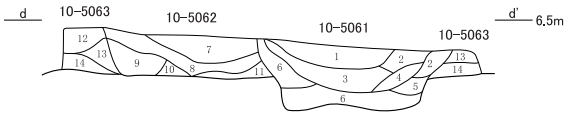
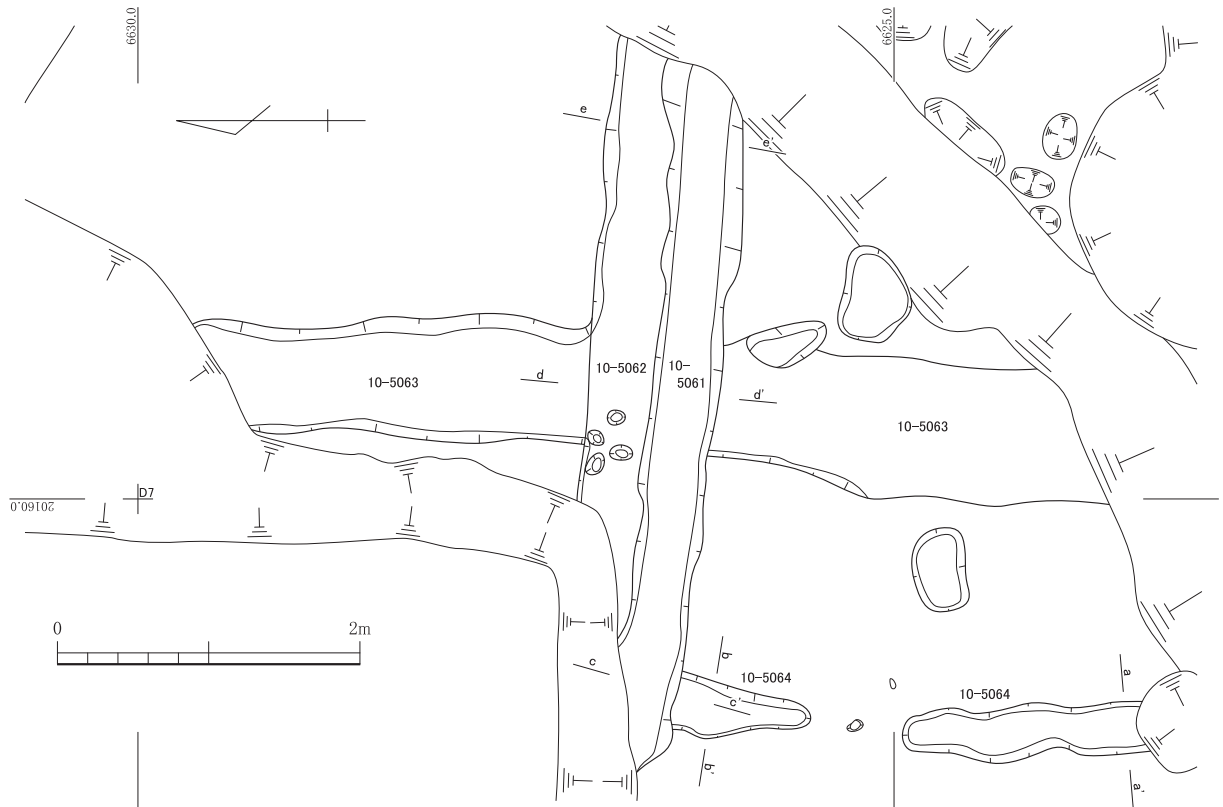


遺構9-252

No.	土色	土質	炭化物	磁土	植物	笏谷石(cm)	その他の石(cm)	備考
1	黄灰色	2.5Y4/1 粘質土	少				少(φ0.5~1.0)	後世の造成土
2	黄灰色	2.5Y4/1 粘質土	少					後世の造成土
3	オリーブ色	5Y5/4 砂質土	少					後世の造成土
4	灰色	5Y4/1 粘質土	少					後世の造成土
5	黄灰色	2.5Y4/1 粘質土	少			少(φ0.5~1.0)		後世の造成土
6	黒褐色	2.5Y3/1 粘質土	少			少(φ0.5~1.0)		254層土
7	黄灰色	2.5Y4/1 粘質土	少					254層土
8	黄灰色	2.5Y4/1 粘質土	少					254層土
9	黄灰色	2.5Y4/1 粘質土	少					
10	黄灰色	2.5Y4/1 シルト						
11	黄灰色	2.5Y4/1 シルト						



図193 溝④ (S=1/50・1/20)



遺構10-5064

No.	土色	土質	炭化物	焼土	植物	笏谷石 (cm)	その他の石 (cm)
1	暗褐色	10YR3/3	粘質土				
2	オリーブ灰色	10Y6/2	粘土				

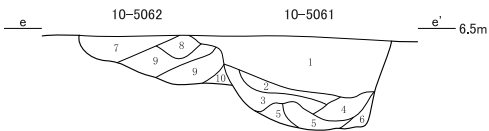
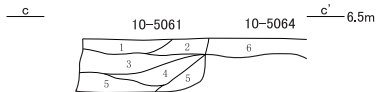


遺構10-5061・5062・5063

No.	土色	土質	炭化物	焼土	植物	笏谷石 (cm)	その他の石 (cm)	備考
1	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘土	少				鉄分少量
2	黒褐色	10YR2/3	粘土					鉄分少量
3	灰黄色	2.5Y6/2	粘土					
4	オリーブ褐色	2.5Y4/3	粘土					鉄分少量
5	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	少				鉄分少量
6	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘土	少				鉄分少量
7	暗灰黄色	2.5Y5/2	粘土	少				鉄分少量
8	黄灰色	2.5Y5/1	粘土	少				鉄分少量
9	褐灰色	10YR4/1	粘土					鉄分少量
10	明黄褐色	2.5Y6/6	粘土					鉄分少量
11	オリーブ褐色	2.5Y4/4	粘土					鉄分少量
12	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土					鉄分少量
13	黒褐色	10YR3/2	粘土					鉄分少量
14	灰黄褐色	10YR4/2	粘土					鉄分少量

遺構10-5064

No.	土色	土質	炭化物	焼土	植物	笏谷石 (cm)	その他の石 (cm)
1	暗褐色	10YR3/3	粘質土				
2	オリーブ灰色	10Y6/2	粘土				



遺構10-5061・5064

No.	土色	土質	炭化物	焼土	植物	笏谷石 (cm)	その他の石 (cm)
1	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質土				
2	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土				
3	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土				
4	灰オリーブ色	5Y4/2	粘質土				
5	灰オリーブ色	5Y5/3	粘質土				
6	暗褐色	10YR3/3	粘質土				

遺構10-5061・5062

No.	土色	土質	炭化物	焼土	植物	笏谷石 (cm)	その他の石 (cm)	備考
1	暗褐色	7.5YR3/3	粘質土					鉄分少量
2	オリーブ褐色	2.5Y4/4	粘質土					鉄分少量
3	黒褐色	10YR3/2	粘質土					
4	褐色	10YR4/4	粘質土					
5	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘質土					
6	灰黄褐色	10YR4/2	粘質土					
7	黒褐色	7.5YR3/2	粘質土					鉄分少量
8	褐色	10YR4/4	粘質土					
9	暗褐色	10YR3/3	粘質土					鉄分少量
10	黄褐色	2.5Y5/4	粘質土					



図194 溝⑤ (S=1/50・S=1/20)

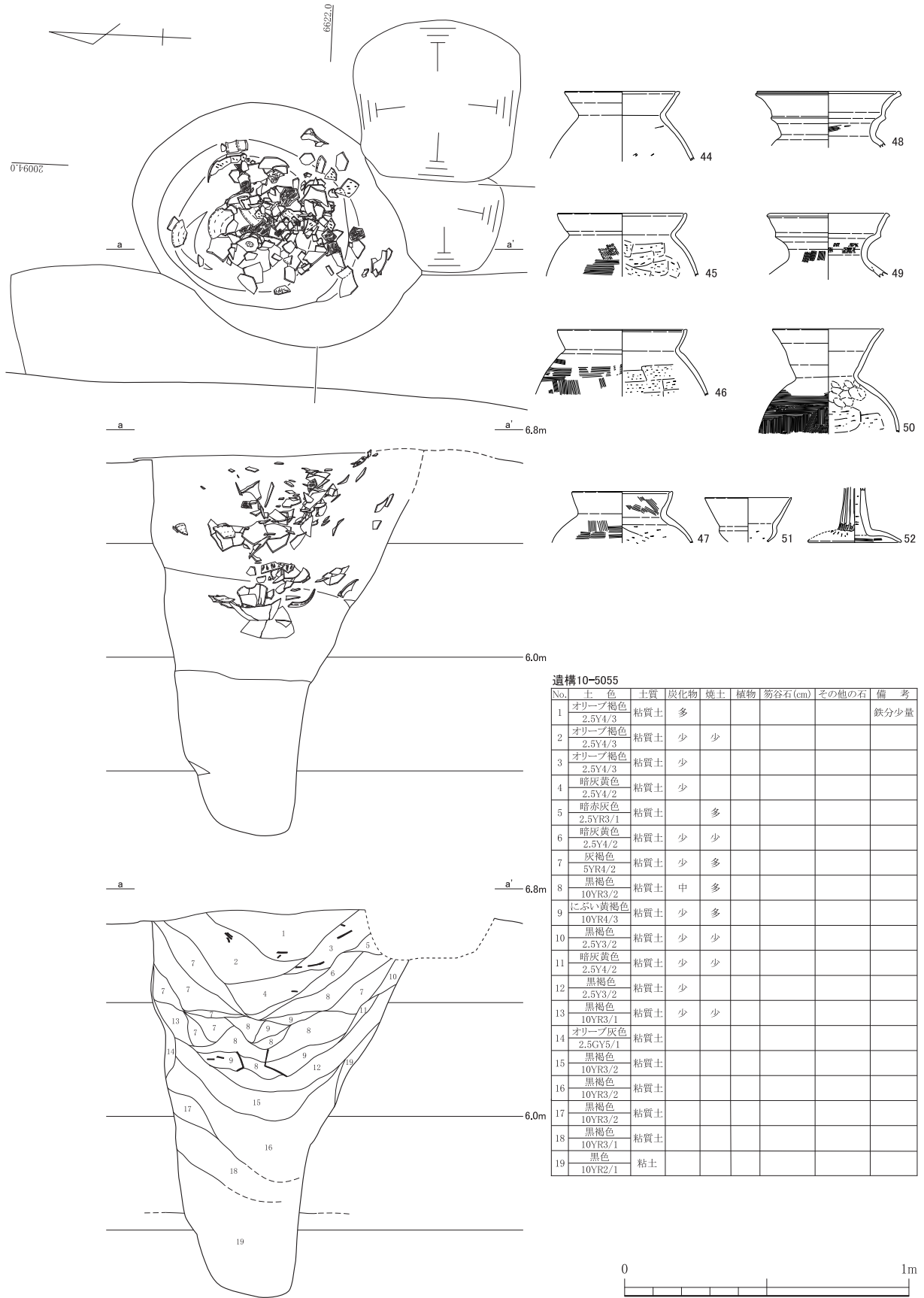


図195 井戸 (S=1/20)

2. 遺物

古墳時代の遺物は、遺構 4-850、10-5046、10-5055 出土のもの、古墳時代以外の遺構に混入していたもの、包含層から出土したものである。遺物は土器 78 個体分、石器 2 点である。土器については、比較的残存率が高いものや、特徴的なものを図示した。土器の内訳は、器種別にみると甕が 40 点と最も多く、つづいて高坏 15 点、壺 12 点、小型丸底土器 5 点、器台 4 点、鉢 2 点となる。

以下、記述は溝状遺構 4-850・10-5046・井戸 10-5055 出土遺物、古墳時代以外の遺構混入遺物、包含層出土遺物の順におこなう。

土器

溝状遺構 4-850 出土遺物（図 196～200-1～39）

溝状遺構 4-850 出土の遺物は、甕 26 点、壺 3 点、高坏 5 点、器台 2 点、小型丸底土器 1 点、鉢 2 点、計 39 点を図示し得た。

甕（図 196～199-1～26） 1～17 は、口縁端部が内方に肥厚する畿内系の甕である。口縁部は、直線的なもの（1～6）と内湾気味なもの（7～17）があり、口縁端部は上面が凹むもの（8～15）がある。調整技法は、摩滅のため確認できないもの（1）を除き、すべてにおいて内面にケズリ・外面にハケが施される。また、底部内面付近に指頭圧痕が残るもの（7・8・10・13・16）、肩部外面に刺突文（7）や波状文（11）を施すものがある。5～8・10～13 には、外面に煤が付着する。18～20 は、小型の甕である。口縁部が内湾するもの（18）と直線的なもの（19・20）があり、口縁端部を丸くおさめるもの（18・19）とやや肥厚するもの（20）がある。体部は、いずれもほぼ球形を呈する。調整技法は、内面にケズリを施し、外面には肩部にヨコハケ・肩部以下に不定方向の細かいハケを施す。18 の底部内面には指頭圧痕が残る。21～26 は、有段口縁を呈する山陰系の甕である。この甕の口縁端部は、内外方に若干肥厚しつつ上方に面をもつもの（21・26）と、内方に肥厚するもの（22）、外方に肥厚しつつ外傾した面をもつもの（23～25）がある。22～25 は、内面にケズリを施す。22・23 は、外面の肩部付近にヨコハケを施す。23 は、肩部外面に波状文が施され、底部内面には指頭圧痕が残る。また底部外面には煤が付着する。

壺（図 199-27～29） 27 は、有段状の口縁を呈する小型の壺である。口縁端部は丸くおさめる。体部は球形を呈する。内面は口縁部にヨコナデ、体部にケズリを施し、底部には指頭圧痕が残る。外面は口縁部にヨコハケの後、ヘラ状工具を用いて縦方向に沈線状の刻みをほぼ等間隔に施す。体部にはタテハケ後にヨコハケを施し、底部付近にはミガキが確認できる。外面の口縁部から底部にかけて若干煤が付着する。28 は、有段口縁を呈する山陰系の壺である。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内外面ともにヨコナデを施す。29 は直口壺である。口縁部は外傾しながら直線的にのび、口縁端部は、若干外方に肥厚し丸くおさめる。内面にケズリを施し、肩部付近には指頭圧痕が残る。外面の頸部以下はタテハケ、肩部付近にはさらにヨコハケを施す。

高坏（図 199-30～34） 30 は、坏部に明瞭な屈曲がなく、脚裾部が強く屈曲し外方にのびる。内外面に細かい横方向のミガキを施す。ほぼ完形である。31・32 は脚部である。ともに強く屈曲し、外方にのびる。外面は横方向のミガキを施す。32 は内面にしぼり痕を残す。33・34 は坏部である。33 は内面にミガキを施す。34 の調整技法は摩滅のため確認できない。

器台（図 199-35・36） 35 は山陰系の鼓形器台で、脚部のみ残存。3 方向の透孔があく。内面にケズリを施す。36 は小型器台である。受部が内湾気味にのび、脚部は直線的にのびる。ともに端部は丸くさ

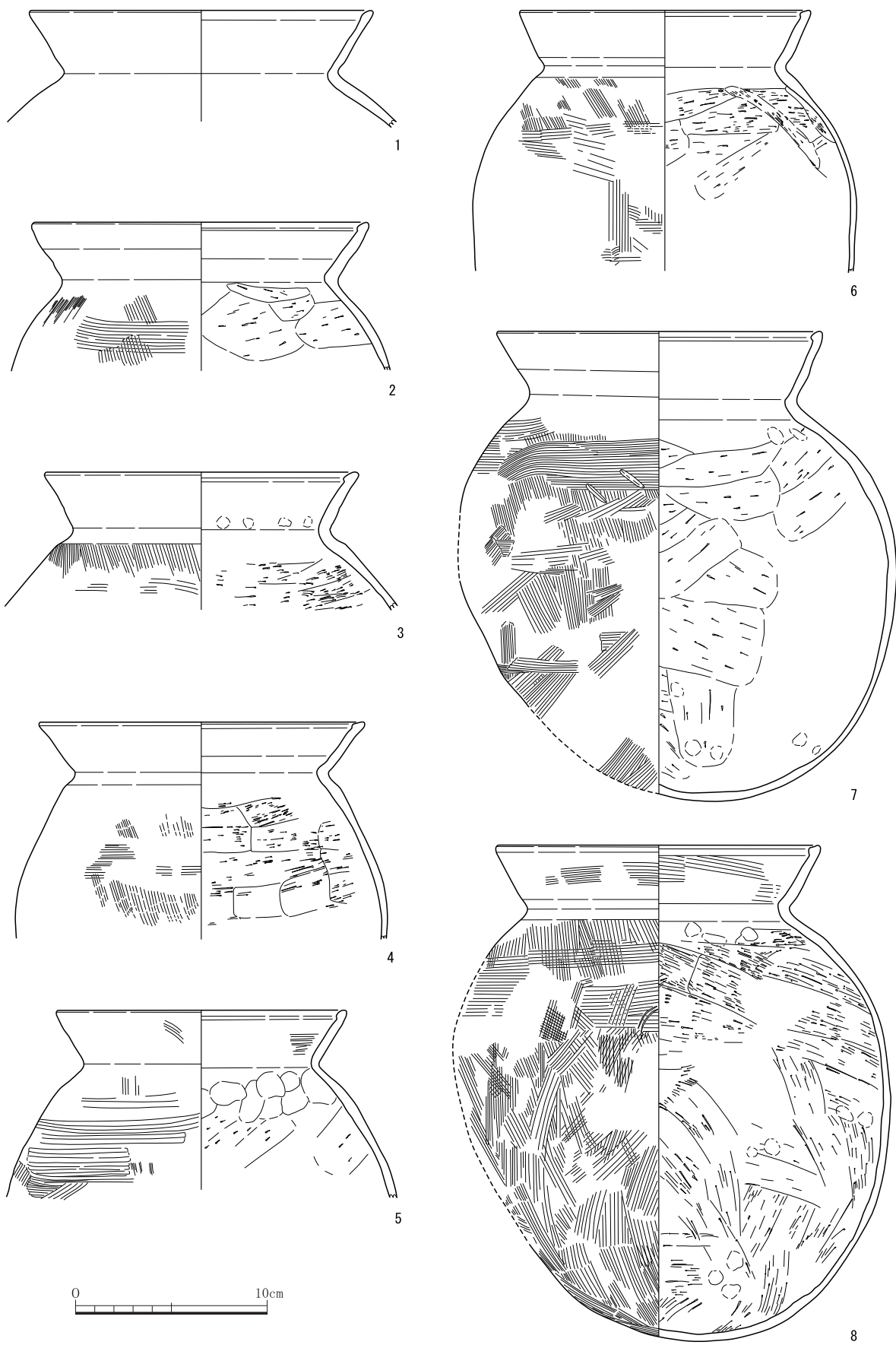


图196 土器① (S = 1/3)

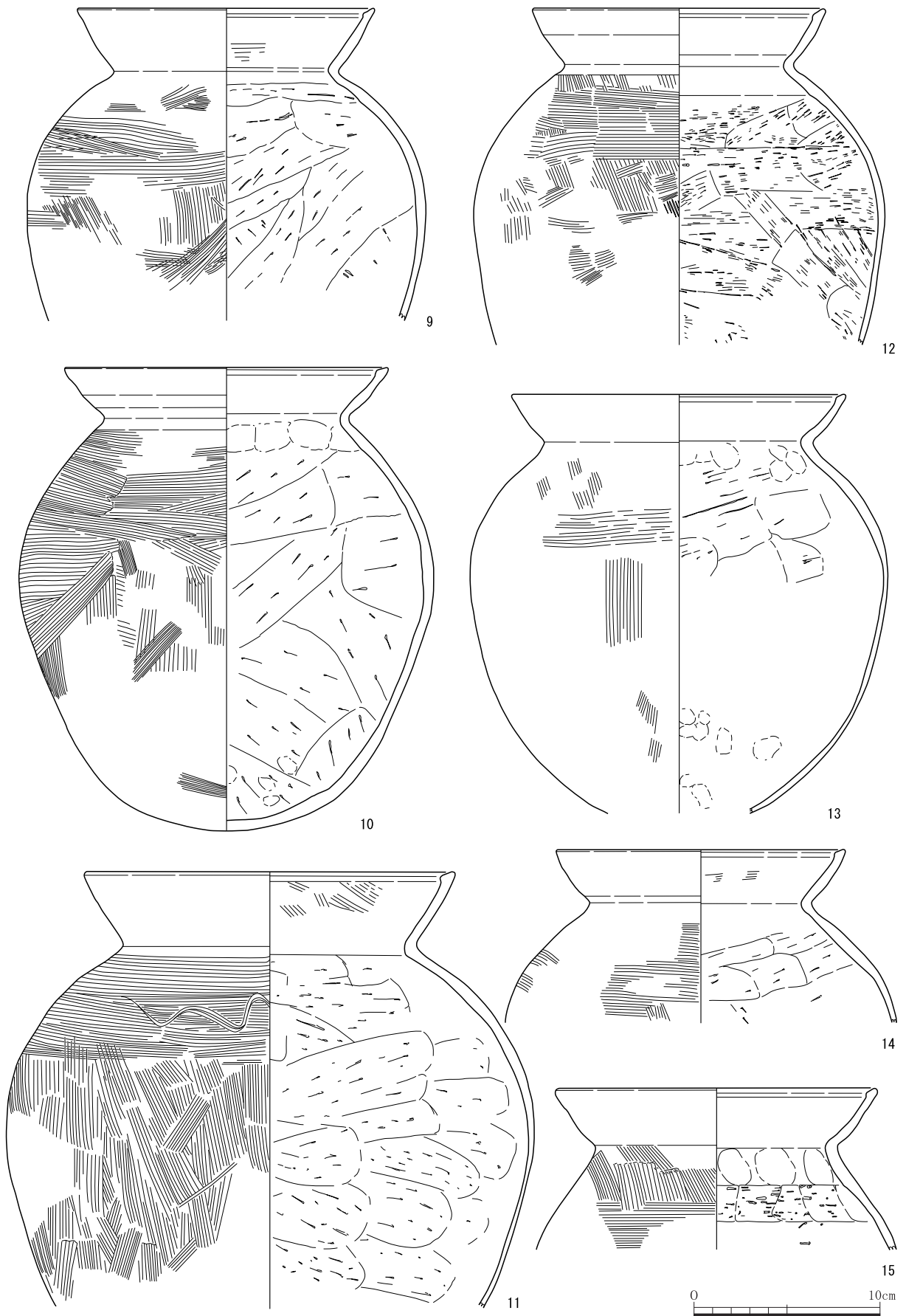
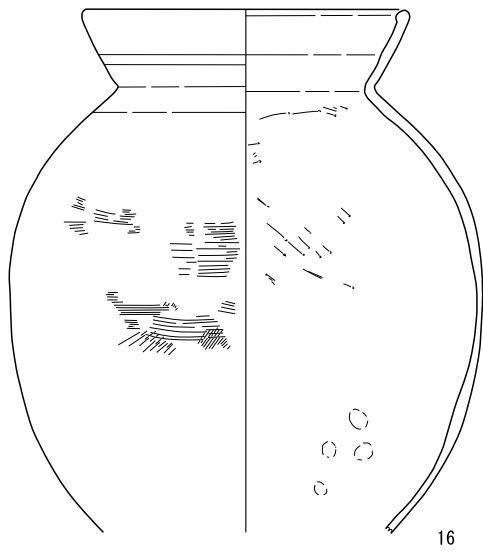
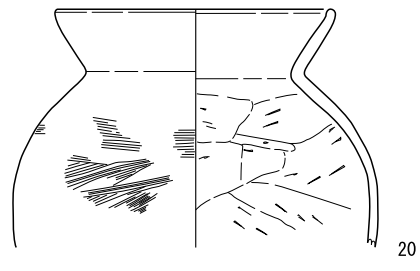


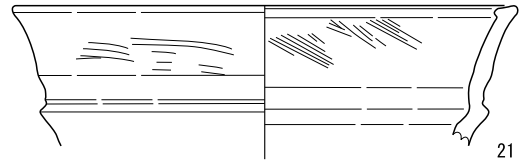
图197 土器② (S=1/3)



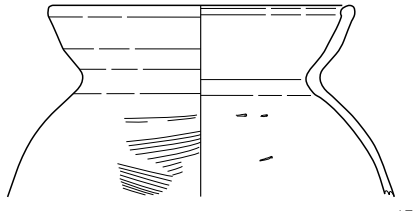
16



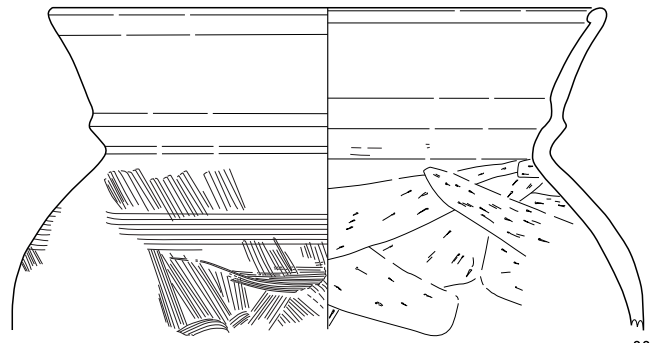
20



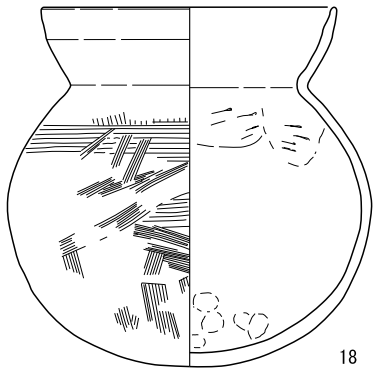
21



17



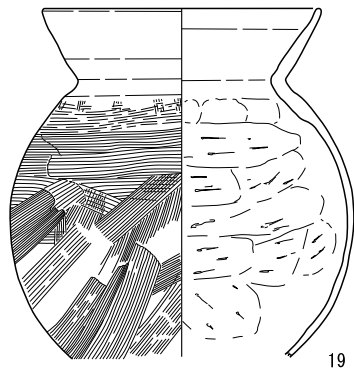
22



18



23



19



图198 土器③ (S=1/3)

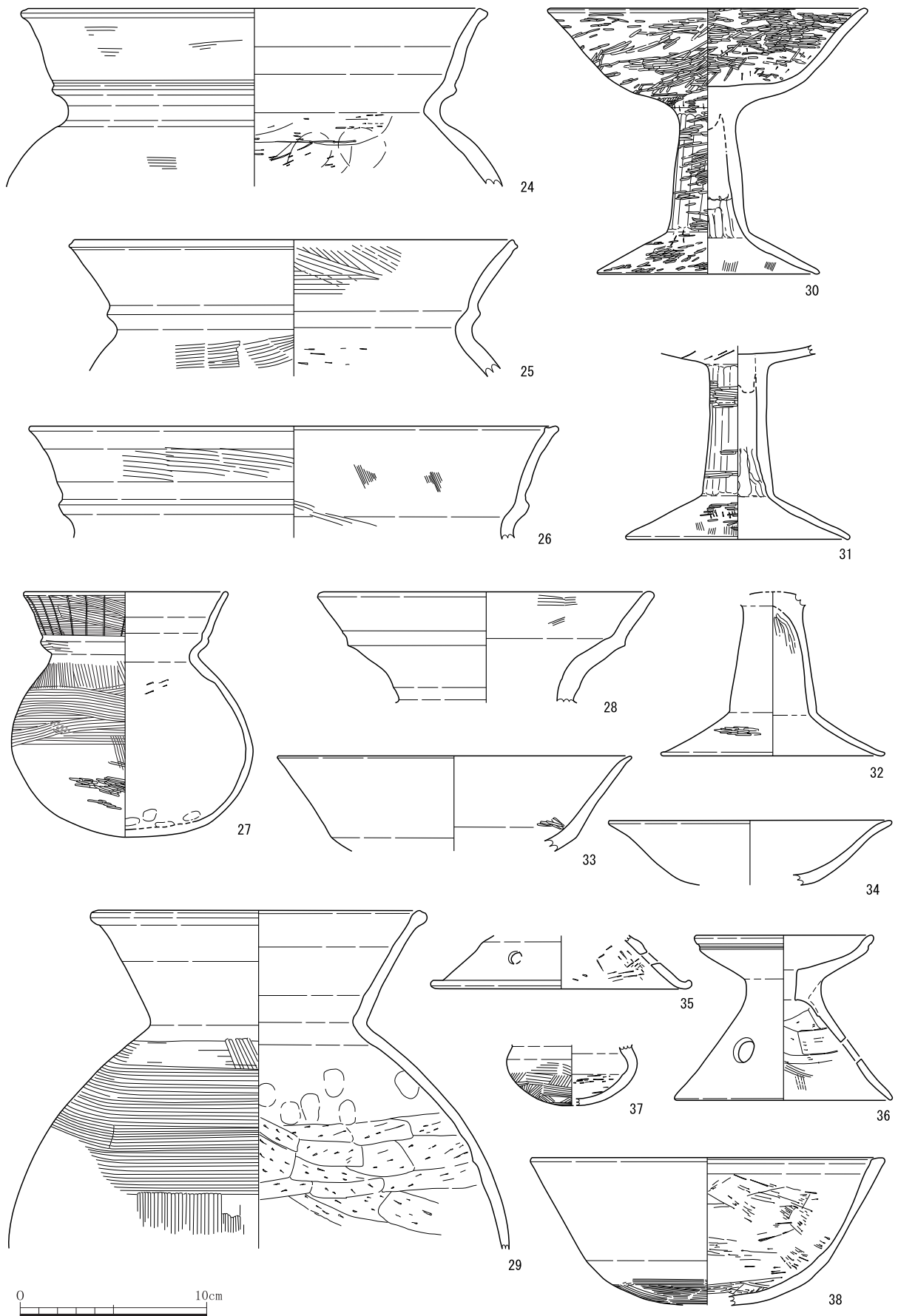


图199 土器④ (S = 1/3)

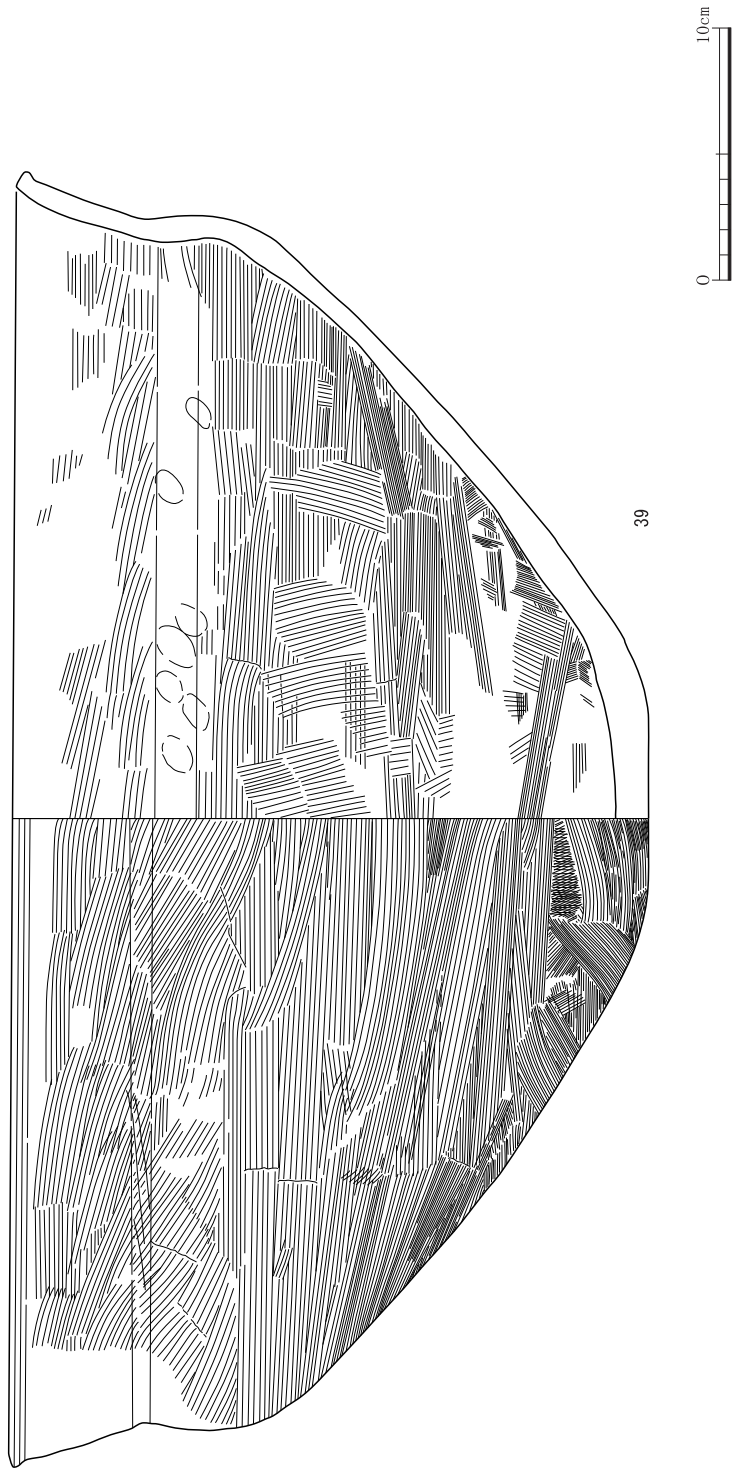


图200 土器⑤ (S=1/3)

める。脚部中程に3方向の透孔がある。中央孔は垂直にあく。調整技法は摩滅のため確認できない。
小型丸底土器(図 199-37) 口縁部が欠失する。内面にケズリ、外面にはハケを施す。胴部最大径7cmを測る。

鉢(図 199~200-38・39) 38は、底部が丸い椀形を呈し、口縁端部は若干内方に肥厚する。内面にケズリ、底部外面にハケを施す。管見では、このような口縁端部肥厚の鉢は、類例が認められない。39は大型の鉢である。平らな底部から直線的に外方にのび、若干くびれて口縁部はさらに外方にのびる。口縁端部は外傾した面をもち、外方に肥厚する。内外面ともにハケを施し、内面に指頭圧痕が残る。口径51cm、底径6.8cm、器高25.2cmを測る。

溝状遺構 10 5046 出土遺物(図 201-40~43)

溝状遺構 10-5046 出土の遺物は、甕2点、壺2点、計4点を図示し得た。

甕(図 201-40・41) とともに口縁端部が内方に肥厚する畿内系の甕である。40は口縁部が内湾し、口縁端部の上面がやや凹む。内面にケズリ、外面にはヨコハケを施す。外面の口縁部と肩部には煤が付着する。41は口縁部がやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。調整技法は摩滅のため確認できない。

壺(図 201-42・43) 42は口縁部がほぼ直線的にのび、口縁端部は丸くおさめる。底部欠損のため全形態はつかめないが、胴部はやや下膨れの形態を呈する。内面は口縁部に縦方向のミガキ、体部にハケが施され、肩部付近に指頭圧痕が残る。外面は全体に不定方向のハケが施され、一部にミガキが確認できる。43は、有段口縁を呈する山陰系の壺である。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。調整技法は摩滅のため確認できない。

井戸 10 5055 出土遺物(図 201-44~52)

井戸 10-5055 出土の遺物は、甕4点、壺3点、小型丸底土器1点、高坏1点、計9点を図示し得た。

甕(図 201-44~47) 44~47は、口縁端部が内方に肥厚する畿内系の甕である。口縁部の形状は、44はほぼ直線的にのび、45~47は内湾する。46は口縁端部の上面に凹みをもつ。45~47は内面にケズリ、外面にハケを施す。44は摩滅のため調整技法は確認できない。46・47は外面に煤が付着する。

壺(図 201-48~50) 48・49は、有段口縁を呈する山陰系の壺である。48は口縁部が外反し、口縁端部には沈線をめぐらす。内外面にヨコナデを施す。49は口縁端部に外傾した面をもち、若干外方に肥厚する。内外面にヨコナデを施す。50は直口壺である。口縁部は外傾し、直線的に伸びる。内面はケズリを施し、肩部付近に指頭圧痕が残る。外面は頸部以下にタテハケ、肩部付近にはさらにヨコハケを施す。外面の体部から口縁部にかけて煤が付着する。

小型丸底土器(図 201-51) 口縁部は外傾し直線的にのびる。内面にはケズリが施される。外面の調整技法は摩滅のため確認できない。口径11cm、胴部最大径8cmを測る。

高坏(図 201-52) 脚部のみ残存。脚裾部が強く屈曲し、裾部はアーチ状に湾曲する。内面はケズリ、外面は太い縦方向のミガキの後、屈曲部はさらに細かく縦ミガキを施す。

古墳時代以外の遺構混入遺物(図 202-53~66)

古墳時代以外の遺構に混入した土器のうち、壺1点、甕3点、高坏6点、器台3点、小型丸底土器1点、計14点を図示し得た。

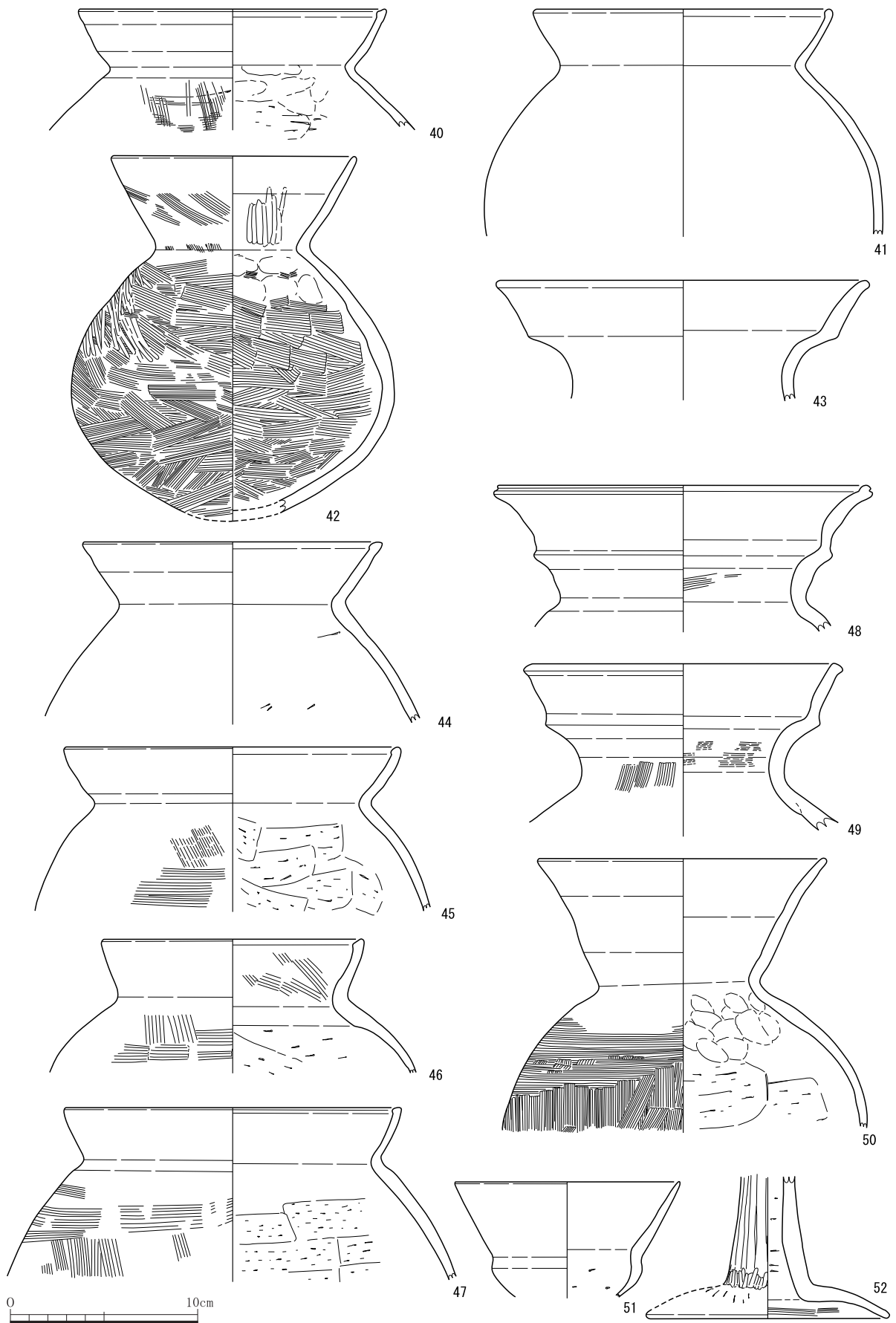


图201 土器⑥ (S=1/3)

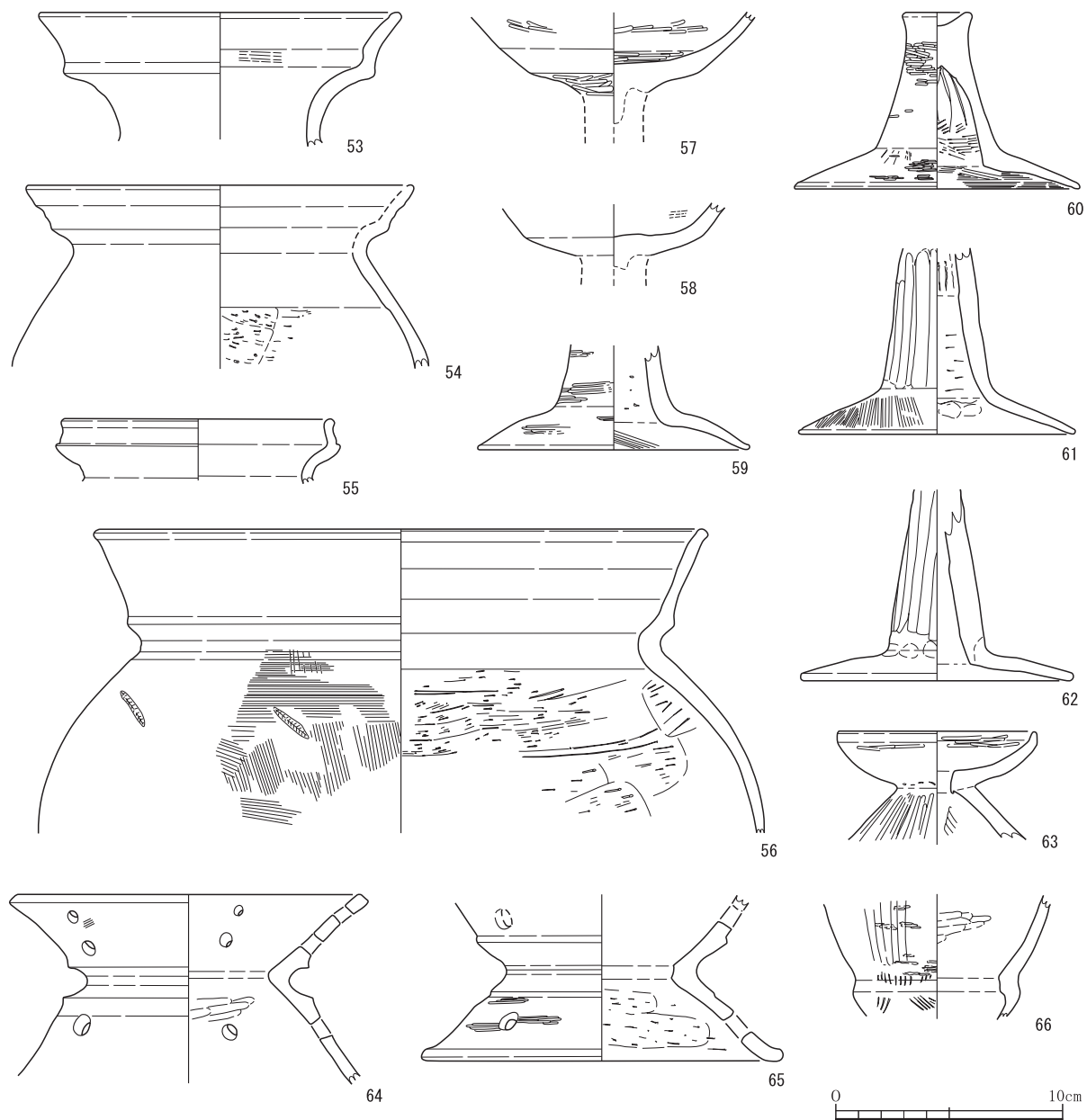


図 202 土器 (S = 1 / 3)

壺 (図 202-53) 有段口縁を呈する山陰系の壺である。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面はヨコハケ後にヨコナデ、外面はヨコナデを施す。

甕 (図 202-54~56) 54 は、有段状の口縁を有するいわゆる月影式の甕である。定型化した月影形甕が崩れた段階のものといえる。体部内面にケズリを施す。

55・56 は、有段口縁を呈する山陰系の甕である。55 は口縁部が内傾、口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。56 は口縁端部に外傾した面をもち、僅かに外方に肥厚する。内面はケズリ、外面はタテハケ後に肩部にヨコハケを施す。さらに肩部には刺突文を施す。

高坏 (図 202-57~62) 57・58 は坏部である。いずれも口縁端部・脚部を欠失する。57 は内外面に横方向のミガキを施す。59~62 は脚部である。59 は脚裾部が強く屈曲し、裾部はアーチ状に湾曲する。60~62 は脚裾部が強く屈曲し、外方にのびる。59・60 は外面に横方向のミガキを施す。60・61 は内面にしぼり痕を残す。

器台(図 202-63~65) 63 は小型器台である。受部は内湾気味にのび、口縁端部はつまみ上げ丸くおさめる。中央孔は垂直にあく。受部内外面ともに横方向のミガキ、脚部外面には縦方向のミガキを施す。64・65 は山陰系の鼓形器台である。64 は透孔が5方向に受部2段、脚部1段にあく。65 は脚部内面にケズリ、外面には横方向のミガキを施す。脚部に3方向の透孔があく。

小型丸底土器(図 202-66) 口縁部は内湾気味にのびる。口縁部の内面は横方向のミガキ、外面は横方向のミガキの後に縦方向のミガキを施す。胴部最大径7.3 cmを測る。

包含層出土遺物(図 203-67~78)

包含層出土遺物は甕7点、壺1点、高坏2点、小型丸底土器2点、計12点を図示し得た。

甕(図 203-67~73) 67 は、口縁端部が内方に肥厚する畿内系の甕である。口縁部は内湾する。内面にケズリ、外面にハケを施す。68~71 は「く」の字状口縁甕である。68・70・71 は小型品である。68 は口縁部が内湾し、口縁端部は丸くおさめる。内面はケズリを施す。外面は肩部にヨコハケ、肩部以下に不定方向のハケを施す。外面には煤が付着する。69 は短く外反し中程が厚い口縁部を有し、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともにハケを施す。70 は口縁部が直線的にのび口縁端部は丸くおさめる。内外面に横方向のミガキを施す。71 は短くやや外反した口縁部を有し、端部は丸くおさめる。内外面ともにヨコナデを施す。72 は口縁部が内傾し、口縁端部はやや内方に肥厚し丸くおさめる。73 は、有段口縁を呈する山陰系の甕である。口縁端部が内方に肥厚する。外面にハケを施す。

壺(図 203-74) 二重口縁壺である。口縁部は外反し、口縁端部はほぼ垂直な面をもつ。口縁下端部は粘土を貼り足して整形している。内外面ともに口縁部にヨコナデ、頸部にハケ後ヨコナデを施す。

高坏(図 203-75・76) いずれも脚部のみ残存。75 は脚裾部が強く屈曲する。内面にはしぼり痕が残る。76 は脚裾部が強く屈曲し外方にのびる。内面にケズリ、外面にはハケを施す。

小型丸底土器(図 203-77・78) 77 は口縁部が外傾し直線的にのびる。口径10.8 cm、胴部最大径7.4 cmを測る。78 は口縁部が内湾気味にのびる。口縁部の外面にミガキを施す。口径12.8 cm、胴部最大径7.8 cmを測る。口縁部の外面にはミガキを施す。

石器

石器は、溝状遺構4-850 から出土した2点を図示した(図 204-1・2)。1 は、太形蛤刃石斧と見られる。刃部は欠損している。両側面には砥石として利用された痕跡があり、石器の役を終えた後に転用されたもののようである。現状での計測値は、長さ17.1 cm、幅8.2 cm、厚さ4.7 cm、重さ877gを測る。

2 は、とくに加工の認められない細長い川原石である。しかし、中央の一部に沈線状にくぼむ箇所があり、細いひも状のものを結わえるために加工した痕であるとも考えられる。また、下端には敲打痕が認められる。この石の出土位置が、破片となる甕(図 196-8・198-22)などの直上に置かれたような状況であったことから、これらの土器を破砕し、同時に廃棄したものであることが考えられる。また、石器(1)についても、砥石として利用された後、同様に土器の破砕に使用され、廃棄されたことが考えられる。2の計測値は、長さ16.5 cm、幅5.6 cm、厚さ4.6 cm、重さ565gを測る。

(立壁)

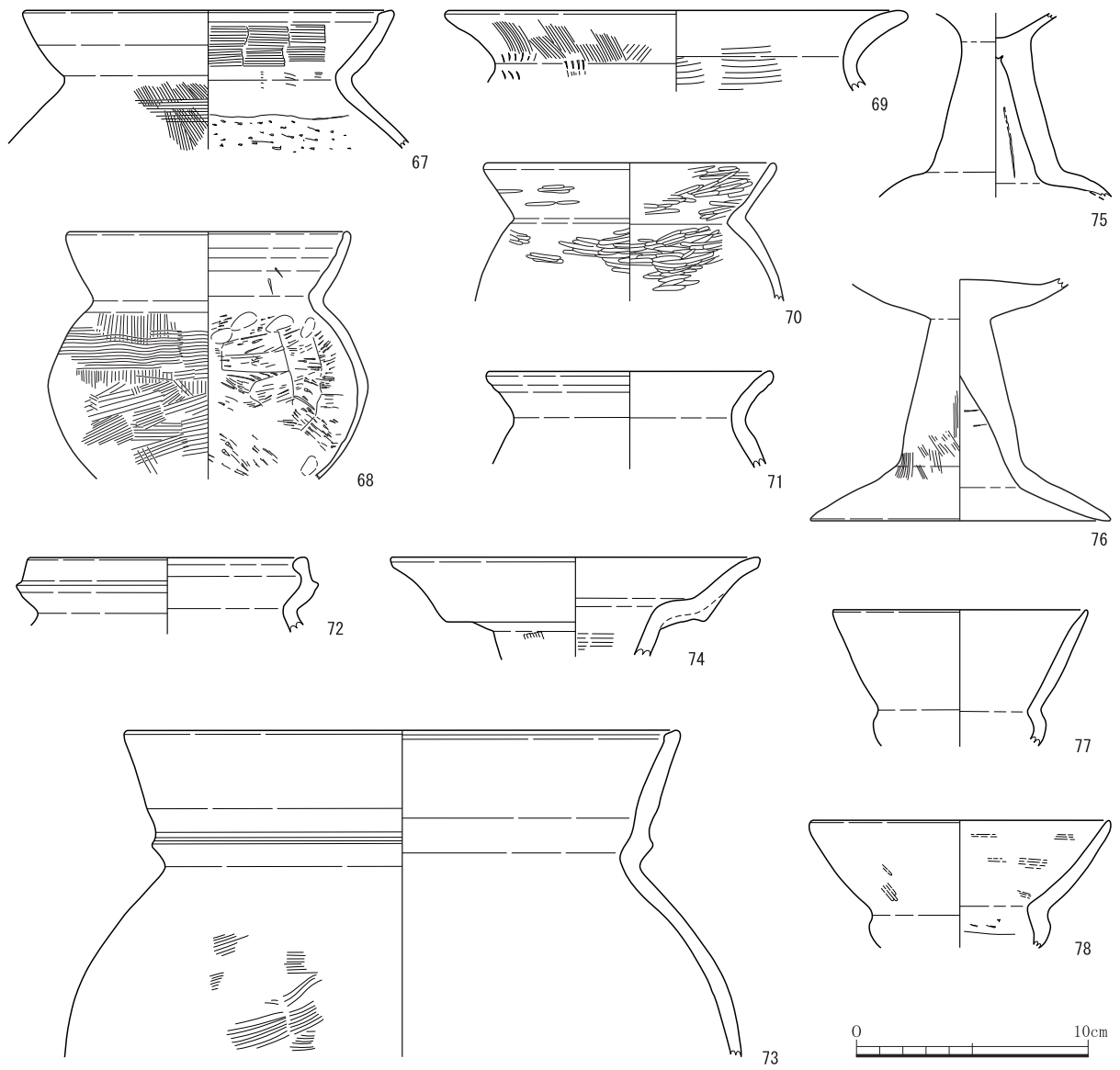


图203 土器⑧ (S=1/3)

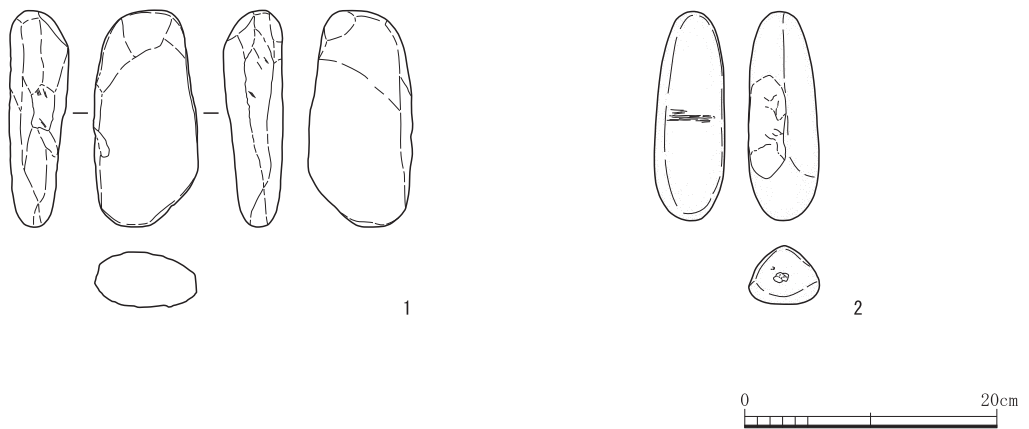


图204 石器 (S=1/6)

3. 小 結

北陸南西部地域における弥生終末期～古墳時代前期の土器研究は、これまで盛んに行われ、整理されている。石川県では田嶋明人氏による漆町遺跡出土遺物を中心とした漆町編年、福井県では堀 大介氏による福井県北部地域の資料を中心に石川の編年と対比して越前の編年が提示されている。本節では、これら先学の研究を参考にして、今回出土した土師器の時間的な位置づけをおこなう。

今回の調査で出土した古墳時代の遺物(図 196～201)を中心に出土土器の器種構成をみると白江式期以降に顕著にあらわれる東海系の影響品や、山陰系の中型甕が見られず、畿内系の甕・高坏や山陰系の壺・大型甕が主体で畿内・山陰色が強いといえる。

これら主体となる器種を形態的な面から堀氏の分類に対応させると、畿内系の甕は口縁端部の内方肥厚が顕著な個体が多く、その肥厚の度合いから甕B 7～8類に相当するといえるが、口縁部の立ち上がり角度・厚みなどから甕B 9類に近い特徴をもつもの(図 201-46)もある。畿内系の高坏は、坏部もしくは脚部が欠失しているものが大半を占めるが、形態が把握できるもの(図 199-30)から高坏G 1類(G 2類?)に相当するといえる。山陰系の大型甕は、すべての個体において口縁下端部の突出に鋭さがなく、やや鈍い形態である。口縁端部は、内外方に肥厚するもの(図 198-21・199-26)、外傾した面をもち外方に肥厚するもの(図 198-23・199-24・25)、内方に肥厚しているもの(図 198-22)があり、分類によると甕D 3～5類に相当する。山陰系の有段口縁壺は、口縁端部を丸くおさめるもの(図 199-28・201-43)、外面に面をもつもの(図 201-48・49)があり、壺A 2・3(～4)類に相当する。

以上の土器組成、形態の特徴をもとに先の編年に当てはめると、主体は漆町編年9～10群・堀 越前編年の木田1～2式(様相16～17)に位置づけられる。

今回の調査で遺構内から出土した土器は、いずれも同じ範疇に捉えられる時期のものと思われる。このうち半数の土器が溝状遺構4-850から出土しており、その出土状況は極めて高い一括性を示すことから、それらは同時期に使用され、同時に廃棄された土器群であると言える。また、井戸10-5055の出土土器も、同様に一括性の高いものであり、今回検出した土器はいずれも同時期の所産であると言い得るものであり、この土器群は今後の土器研究に有効な資料になるといえる。(立壁)

参 考 文 献

- 田嶋明人 1986 「 考察 - 漆町遺跡出土土器の編年的考察 - 」 『漆町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
橋本澄夫編 1975 『金沢市高島遺跡 - 第1・2次発掘調査報告書』 金沢市教育委員会
堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年 - 北陸南西部を中心に - 」 『朝日山』 朝日町教育委員会
堀 大介 2006 「越前・加賀地域」 『古式土師器の年代学』 財団法人 大阪府文化財センター

表33 土器観察表

挿図 番号	遺構番号 又は層位	器種	法量 (cm)			調整技法		色調(内面又は 外面/内面)	焼成	胎土(砂粒径・含 有量)	残存率	備考
			口径	器高	底径	外面	内面					
196-1	4-850	甗	17.8	残6.1		摩滅のため調整技法不明		淡黄橙	やや不良	1~3mm・多	1/10未滿	
196-2	4-850	甗	17.3	残7.7		口縁部:Y 肩部:H Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	淡黄橙/黄橙	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
196-3	4-850	甗	16.2	残7.2		口縁部:Y 肩部:H	口縁部:O 体部:K	淡黄橙/黄橙	良好	1~2mm・中	1/10	
196-4	4-850	甗	16.8	残11.35		口縁部:Y 肩部:H Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	淡黄橙/灰褐	良好	1mm前後・中	1/8	
196-5	4-850	甗	15.6	残9.8		口縁部:H Y? 頸部:Y 体部:H	口縁部:H 肩部:O 体部:K	淡黄橙	やや不良	1~2mm・中	1/4	外面(胴)に煤付着
196-6	4-850	甗	15	残13.7		口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	淡黄褐	良好	1~2mm・中	1/8	外面(口縁~肩)に煤付着
196-7	4-850	甗	16.8	残24.45		体部:H	体部:K 肩・底部:O	淡黄橙	良好	1~2mm・少	2/3	外面(胴~底)に煤付着 刺突文あり
196-8	4-850	甗	16.7	25.9		口縁部:H Y 体部:H	口縁部:H Y 肩部:K O 体部:K 底部:K O	黄褐	良好	1~2mm・中	1/2	外面(口縁~底)に煤付着
197-9	4-850	甗	15.8	残16.8		口縁部:Y 体部:H	口縁部:H Y 肩部:K Y 体部:K	淡黄橙	良好	1~3mm・中	1/5	
197-10	4-850	甗	17.3	残24.85		口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 肩部:O Y 体部:K 底部:K O	淡黄褐/橙赤褐	良好	1~3mm・多	2/3	外面(口縁~底)に煤付着
197-11	4-850	甗	19.7	残23.35		口縁部:Y 体部:H	口縁部:H Y 体部:K	淡黄褐/橙	良好	1~4mm・多	1/5	外面(底)に煤付着 波状文あり
197-12	4-850	甗	15.6	残18.1		口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	淡褐	良好	1~3mm・中	1/5	外面(底付近)に煤付着
197-13	4-850	甗	17.7	残22.5		体部:H	肩部:O 体部:K 底部:K O	淡黄橙	良好	1~2mm前後・少	1/4	外面(肩~胴)に煤付着
197-14	4-850	甗	15.4	残9.3		口縁部:Y 体部:H	口縁部:H Y 体部:K	淡黄褐/淡橙褐	良好	1~2mm前後・中	1/10	
197-15	4-850	甗	17	残8.7		口縁部:Y 頸部:H N 体部:H	口縁部:Y 肩部:O 体部:K	黄褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
198-16	4-850	甗	13.1	残20.7		口縁部:Y 体部:H	体部:K 底部:O	淡黄橙/淡黄褐	やや不良	1~2mm・多	1/4	
198-17	4-850	甗	11.8	残7.46		口縁部:Y 体部:H	体部:K	黄褐	やや不良	1~2mm・中	1/10未滿	
198-18	4-850	甗	11.6	残14.25		体部:H	口縁部:Y 体部:K 底部:O	淡黄白	良好	1mm前後・少	1/2	
198-19	4-850	甗	10.9	残13.8		口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 肩部:O Y 体部:K	淡黄白	良好	1mm前後・極少	1/3	
198-20	4-850	甗	11.6	残9.45		口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	淡黄白	やや不良	1mm前後・少	1/6	
198-21	4-850	甗	19.8	残5.55		口縁部:H Y	口縁部:H Y	淡黄橙	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
198-22	4-850	甗	21.8	残12.8		口縁部:Y 肩部:H Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	淡黄橙	良好	1mm前後・少	1/8	外面(肩)に煤付着
198-23	4-850	甗	23.8	31.45		口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 頸部:H 体部:K	淡黄白	良好	1~2mm前後・中	2/3	外面(底)に煤付着 波状文あり
199-24	4-850	甗	24.2	残9.55		口縁部:H Y 体部:H	口縁部:H Y 肩部:K O 体部:K 底部:K O	淡黄橙	良好	1~2mm・中	1/10	
199-25	4-850	甗	23.4	残7.3		体部:H	口縁部:H 体部:K	橙褐/黄褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
199-26	4-850	甗	28.2	残6		口縁部:H Y?	口縁部:H Y	灰黄白	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
199-27	4-850	壺	10.7	13.2		口縁部:YH TH 頸部:H Y 体部:H 底部:N 一部M	口縁部:Y 体部:K 底部:O	黄橙	良好	1mm以下・極少	3/4	外面(口縁~底)に煤付着
199-28	4-850	壺	17.4	残5.95		口縁部:Y	口縁部:H Y	黄橙	良好	1mm前後・中	1/10未滿	
199-29	4-850	壺	17.4	残18.1		口縁部:Y 頸部:H N? 体部:H	口縁部:Y 肩部:O 体部:K	淡黄橙	良好	1~2mm・中	1/4	
199-30	4-850	高坏	16.8	14.3	11.9	环部:K YM 脚部:TM YM 裾部:K YM	环部:K YM 裾部:H Y	橙褐	良好	1mm前後・極少	ほぼ完形	
199-31	4-850	高坏		残10.4	11.8	环部:K 脚部:TM YM 裾部:H K YM	环部:H	淡黄橙	良好	1~2mm・極少	1/5	
199-32	4-850	高坏		残8.8	11.8	裾部:YM	摩滅のため調整技法不明	灰黄白	良好	1mm以下・極少	1/6	しぼり痕残存
199-33	4-850	高坏	18.9	残5.15		摩滅のため調整技法不明	环部:M	淡橙	良好	1mm前後・中	1/10未滿	
199-34	4-850	高坏	15.1	残3.5		摩滅のため調整技法不明		淡黄橙	良好	1mm以下・極少	1/10未滿	
199-35	4-850	器台		残2.9	13.6	脚端部:Y	脚部:K 脚端部:Y	淡黄白/橙赤褐	良好	1~2mm・中	1/10未滿	脚部3方向?透孔(円)
199-36	4-850	器台	9.4	8.85	11.4	摩滅のため調整技法不明	脚部:H K	淡黄橙	良好	1mm前後・極少	2/3	接合痕残存 脚部3方向透孔(円)
199-37	4-850	小型丸底		残3.25		体部(上):Y 体部:H	体部(上):K Y 体部:K	黄橙	良好	1mm前後・少	2/3	胴部最大径7cm
199-38	4-850	鉢	18.8	残7.9		口縁部:Y 底部:H	口縁部:Y 体部:K	淡黄橙/黄褐	良好	1~2mm・中	1/4	
200-39	4-850	鉢	51	25.2	6.8	口縁部:Y H 体部:H	口縁部:Y H 体部(上):H O 体部:H	淡黄褐	良好	1mm前後・多	3/4	
201-40	10-5046	甗	16.3	残6.45		口縁部:Y 肩部:H Y	口縁部:Y 肩部:K O	褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	外面(口縁~肩)に煤付着
201-41	10-5046	甗	15.6	残12		摩滅のため調整技法不明		橙	やや不良	1~4mm・多	1/10未滿	
201-42	10-5046	壺	12.9	残19		口縁部:H Y? 体部:H 一	口縁部:Y 脚端部:Y 口縁部:TM 肩部H O 体部:H	淡黄橙	良好	1~2mm・少	2/3	
201-43	10-5046	壺	19.6	残6.4		摩滅のため調整技法不明		淡赤褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	

押図番号	遺構番号又は層位	器種	法量(cm)			調整技法		色調(内面又は外面/内面)	焼成	胎土(砂粒径・含有量)	残存率	備考	
			口径	器高	底径	外面	内面						
201-44	10-5055	甕	15.8	残9.65		摩滅のため調整技法不明	口縁部:Y 肩部:Y→H 体部:H	口縁部:Y 体部:K	橙褐/淡黄褐	良好	1~2mm・中	1/10未滿	
201-45	10-5055	甕	17.7	残8.8			口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 体部:K	暗橙褐	良好	1mm前後・中	1/10未滿	外面(頸)に煤付着赤彩?
201-46	10-5055	甕	13.7	残7.1			口縁部:Y 体部:H	口縁部:H→Y 体部:K	淡黄褐	良好	1~3mm・中	1/10	外面(口縁~頸)に煤付着
201-47	10-5055	甕	17.9	残9.2			口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y・K	暗黄褐	やや不良	1~2mm・多	1/10未滿	外面(頸~肩)に煤付着
201-48	10-5055	壺	19.4	残7.8			口縁部:Y	頸部:H→Y	淡橙褐/黄橙	良好	1mm前後・少	1/10未滿	外面(口縁)に煤付着沈澱あり
201-49	10-5055	壺	16	残8.9			口縁部:Y 頸部:H→Y	口縁部:Y 頸部:H→Y	淡黄褐	良好	1~2mm・多	1/7	
201-50	10-5055	壺	15.2	残14.4			口縁部:Y 体部:H	口縁部:Y 肩部:O 体部:K	淡黄褐	良好	1~3mm・少	1/4	外面(口縁~胴)に煤付着
201-51	10-5055	小型丸底	11.9	残6.15		摩滅のため調整技法不明	体部:K	体部:K	淡黄白	良好	1~2mm・極少	1/5	
201-52	10-5055	高杯		残7.6	12.6	柱状部:TM 裾部:K	柱状部:K 裾部:H→Y	柱状部:K 裾部:H→Y	淡褐	良好	1mm前後・少	1/10	
202-53	9-141	壺	15.8	残6		口縁部:Y	口縁部:H→Y	口縁部:H→Y	橙赤褐	良好	1mm以下・中	1/10未滿	
202-54	4-594	甕	17	残8.1		口縁部:Y	摩滅のため調整技法不明	摩滅のため調整技法不明	淡黄白	不良	1mm前後・中	1/10未滿	
202-55	9-245・252	甕	11.7	残2.85		口縁部:Y	口縁部:Y	口縁部:Y	橙赤褐	良好	1mm以下・極少	1/10未滿	
202-56	2-416	甕	26.6	残13.4		体部:H	口縁部:Y 体部:K	口縁部:Y 体部:K	赤褐/暗黄褐	良好	1~3mm・多	1/10	刺突文あり
202-57	9-131・242	高杯		残4.9		坏部:K→YM	坏部:M	坏部:M	淡黄橙	良好	1mm前後・少	1/7	
202-58	9-180	高杯		残2.95		摩滅のため調整技法不明		摩滅のため調整技法不明	橙赤褐	やや不良	1~2mm・少	1/10	
202-59	9-245・28	高杯		残4.6	11.8	柱状部:YM	柱状部:K 裾部:H→Y	柱状部:K 裾部:H→Y	灰橙褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
202-60	4-823	高杯	12.5	残7.8		柱状部:YM 裾部:K→YM	柱状部:K 裾部:H	柱状部:K 裾部:H	黄褐	良好	1~2mm・中	2/3	しぼり痕残存
202-61	9-104	高杯		残8.2	12	柱状部:YM 裾部:H	柱状部:K 裾部:O 裾端部:Y	柱状部:K 裾部:O 裾端部:Y	淡橙褐	良好	1mm前後・極少	1/5	しぼり痕残存
202-62	8-5	高杯		残8.45	11.7	柱状部:TM・O	摩滅のため調整技法不明	摩滅のため調整技法不明	淡黄褐	良好	1~2mm・少	1/8	接合痕残存
202-63	9-180	器台	8.6	残4.8		受部:一部YM 裾部:K→TM	口縁端部:Y 受部:YM 裾部:K	口縁端部:Y 受部:YM 裾部:K	橙赤褐	良好	1mm以下・中	1/8	
202-64	9-166・168	器台		残8.35	15	H・Y(Mの可能性あり)	受部:M 脚台部:K	受部:M 脚台部:K	淡橙褐	良好	1mm前後・少	1/10	上・下位5方向?透孔(円)
202-65	10-1338-2	器台		残7.3	15.5	受部:Y 脚台部:M	脚台部:K	脚台部:K	橙赤褐	良好	1mm前後・少	1/3	上位3方向?・下位3方向透孔(円)
202-66	9-245	小型丸底		残5.5		口縁部:YM→TM 体部:H	口縁部:M	口縁部:M	暗褐	良好	1mm以下・極少	1/6	胴部最大径7.3cm
203-67	9-4-包含層	甕	15.8	残5.9		口縁部:Y 頸部:H→Y 体部:H	口縁部:H→Y 体部:K	口縁部:H→Y 体部:K	黒/灰褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	
203-68	12-包含層	甕	12	残10.7		口縁部:Y 頸部:H→Y 体部:H	口縁部:Y→一部K 肩部:K→O 体部:K 底部:O	口縁部:Y→一部K 肩部:K→O 体部:K 底部:O	暗褐	良好	1~2mm・中	1/4	外面(口縁~底)に煤付着
203-69	9-3-包含層	甕	19.6	残3.5		口縁部:H→Y	口縁部:H	口縁部:H	橙赤褐/淡黄褐	やや不良	1~3mm・中	1/10未滿	
203-70	12-包含層	甕	12.4	残5.95		口縁部:Y→YM 体部:YM	口縁部:YM 体部:YM	口縁部:YM 体部:YM	暗黄褐	良好	1mm以下・極少	1/10未滿	
203-71	9-4-包含層	甕	12.2	残4.2		口縁部:Y	口縁部:Y	口縁部:Y	黄橙	やや不良	1mm前後・少	1/10未滿	
203-72	9-4-包含層	甕	11.8	残3.2		口縁部:Y	口縁部:Y	口縁部:Y	淡黄褐	良好	1mm以下・極少	1/10未滿	
203-73	2-包含層	甕	23.7	残14.15		体部:H	摩滅のため調整技法不明	摩滅のため調整技法不明	淡赤褐/淡黄褐	やや不良	1mm前後・中	1/10	
203-74	9-4-包含層	壺	15.8	残4.25		口縁部:Y 頸部:H→Y	口縁部:Y 頸部:H→Y	口縁部:Y 頸部:H→Y	淡橙褐	良好	1mm前後・少	1/10未滿	接合痕残存
203-75	9-4-包含層	高杯		残7.9		摩滅のため調整技法不明		摩滅のため調整技法不明	淡黄褐	やや不良	1mm前後・少	1/5	しぼり痕残存
203-76	2-4-包含層	高杯		残10.45	12.9	柱状部:H	柱状部:K	柱状部:K	淡橙褐	やや不良	1mm前後・少	1/4	
203-77	9-4-包含層	小型丸底	10.9	残5.9		摩滅のため調整技法不明		摩滅のため調整技法不明	淡橙	やや不良	1mm前後・少	1/6	胴部最大径7.4cm
203-78	9-4-包含層	小型丸底	12.8	残5.5		口縁部:M	口縁部:H 体部:K	口縁部:H 体部:K	淡橙	良好	1mm以下・極少	1/5	胴部最大径7.8cm

Y=ヨコナデ H=ハケ O=指オサエ K=ケズリ N=ナデ M=ミガキ(YM=ヨコミガキ・TM=タテミガキ)

表34 石器観察表

押図番号	遺構番号又は層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
204-1	4-850	17.1	8.2	4.7	877	刃部分、摩滅
204-2	4-850	16.5	5.6	4.6	565	線状痕、敲打痕残る